
パディシャン＝ブルカ ～太陽の都と月の帝国～

羅奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パディシャン＝ブルカ　　太陽の都と月の帝国

【Nコード】

N0993B

【作者名】

羅奈

【あらすじ】

高校の修学旅行でバチカン市国に来ていたココロ。4つ目の教会で不思議な絵を見た彼女は、紀元前のこの地へ時空移動してしまう。神話が多く存在するこの地に、彼女はなぜ来てしまったのか……。異世界神話ファンタジー。

第1話 教会の絵

飛行機から降りると、外が暑いのに初めて気がついた。
空から照りつける太陽が痛い。

ココロは麦わら帽子を深くかぶった。

今は夏休み。そして彼女は高校の修学旅行で、ここイタリアに来ていた。

涼川 すずかわ 心 こころ、16歳。

彼女の長い夏はここから始まる。

イタリア中部にある世界最小の国、バチカン。修学旅行3日目はそこに多くある教会を訪ねまわる。

4つ目の教会の奥深くにある一つの部屋に来たとき、ココロはそこに飾られている一枚の絵に釘づけになっていた。法衣を着た老人が、十字架をヴァンパイアにつきつけている絵だ。

「ココロ、次の教会行ってくてさ。」

ふたつ結びをした友人がココロのところへ来て言った。ココロは絵を見ながら答える。

「沙織。この絵、なんか不思議な感じしない？」

ココロがそう言うと、沙織は首をかしげてココロの隣りで絵を見た。

「別になにも感じないけど…」

「…なんか懐かしいの。どっかで見たような…」

沙織は眉間 みけん にしわを寄せた。

「それってもしかしてデジャヴってやつ？よくあるわよ。それよりも、もううちらかこの教会に残ってないんですけど。」

他の班はおそらく次の教会か、お昼ご飯を食べに行ったことだろう。この教会はあまり有名ではなくむしろあること自体、現地の人でも知らない人がいるかもしれない。

来たときも観光客は非常に少なく、今この教会にいるのはココロと沙織だけだ。

「ねえ沙織、先行ってていいよ。私もう少し見てたいから。」

「ううん、待ってる。じゃ私も他の絵見てこようかな。ちょっと経ったらまた迎えに来るから。」

そう言っつて沙織は部屋から出て行った。一人になったココロは自分の手元のパンフレットを見た。

「この絵、【月と太陽】っていう題名なんだ…。」

ココロは独り言を言っつて気づく。おかしい。

この絵には月も太陽も描かれていない。なのにこの題名は変だ。そしてココロはもう一つ不思議なことに気づいた。

「なにこの文字…。」

先ほどはあきらかに書かれていなかった文字が、絵の左隅に書いてあった。ココロはその文字をなぞり、声にしてみる。

「太陽が満ちるとき月は陰る。月が満ちるとき太陽は陰る。何

言っつてんの、これ。そんなの当たり前じゃない。」

彼女がそう呟くと、一瞬、絵が光ったように見えた。

(…?)

ココロは不気味に思い、身を翻そうとしたその時、ココロをもっと不気味な思いにさせることが起こった。

「絵の…絵に描かれている人たちが消えてる…!!」

ココロはたまらず、全速力で部屋の出口へ向かった。あと一、二歩で部屋から出られたというのに、彼女は出られなかった。

絵から伸びた蔓が、彼女の手足を掴んでいたのだ。信じられない光景にココロは必死でもがき、叫びまくる。

しかし努力もむなしく助けは来ず、そのまま絵の中へ取り込まれてしまった。

第1話 教会の絵（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

初投稿なので、アドバイスや感想などがありましたらぜひお願いします。

第2話 蔓の少女

——その日、少年はいつものようにユリの花を一輪つみ、神殿の前に立った。

ヴァンパイア夜生種による度重なる襲撃で、石で造られたこの神殿には亀裂が走り、穴もあいている。

その穴からは蔦や蔓がはびこり、また壁にはコケがたくさん生えていて、かつては白かった太陽の神殿も、いまでは緑色に変わってしまった。

ディバライト光陽種である少年は、週に一度ここへ来てユリの花を捧げ、神に祈る。

——早く僕たちに太陽の神子を、と。
それが彼の役目だからだ。

少年は石の階段をのぼり、神殿の扉の取っ手をにぎろうとして気づく。扉のすき間から光がもれていた。

（誰かいるのかな…？今日は僕が祈りの日だったはずだけど…）
少年は不審に思って扉を開けてみる。

すると中では、まばゆいほどの光が神殿の中央から発されていた。まぶしすぎて少年はそれを直視することができない。

光がおさまると、少年はその発光体に近づき、その姿を見て目を見開いた。

「お、女の子…！」

光を発していたのは他でもなく、黒髪の女だった。しかも蔓で全身をしばられている。

「なんでこんな所に…。とにかく神官様に伝えなくちゃ…！」

少年はそうつぶやくと、慌しく神殿を飛び出して行った。

ユリの花をそこに忘れて……—

ココロは、神殿にいた穴から差し込む太陽の光で目覚めた。
しばらくボーっとして脳ミソを起動させる準備をする。そして夢の
ことを思い出す。

（今日の夢は一段とまた変わった夢だったなあ……。絵にミステリア
スな現象が起こって、怖くなって逃げようとしたら、絵の中から蔓
がのびてきて引きずり込まれちゃったんだもんなあ……。我ながらす
ごい想像力。）

笑いをもらし、夢の世界を思い出して楽しんだ後、のびをしようと
して体が不自由なことに気づく。

自分をしばっているその存在を見て、ココロの顔はいつきに青ざめ
た。

「……………ウソでしょ。…あれ…夢じゃないわけ…？」

自分の体は蔓つるによつて身動きできない状態になっていた。夢と思っ
ていたあの出来事が現実を起こっている。

よくよく見れば、ここはホテルのふかふかのベッドじゃない。見た
こともない硬い石の祭壇の上だ。

「やだ…。だって沙織、迎えに来るって言ってた…。…もしかして
私、向こうでは行方不明者…？やだよそんなの！まだ修学旅行3日
しか経ってないのに…。」

それに、とココロは自分の心の中でつぶやく。

（好きな人にだってまだ告白してないのに…。）

ココロはこの修学旅行で、幼馴染みのクラスメイトに告白するつも
りでいた。

最近、いい感じになっていたのだ。

もう会えない、そう思うとココロは、こんなことなら早く告白して
おけばよかった、と後悔して目に涙を浮かべた。

「誰か…私をあそこに戻してよお…！」

ココロがそう叫んだとき、神殿の扉が外から開けられた。

第3話 太陽の神子

開かれた扉から太陽の光がさしこむ。ココロはその眩しさに、目をそらした。

「この方ですね、ロタ。」

ロタと呼ばれた少年は、おどしく男の後ろでうなずく。

「なるほど。たしかに予言書に書かれたとおりです。ロタ、お前は城までひとつ走りして王に事を伝えて来なさい。我らにも太陽の神子エクシリオンが現れた、と。」

神官の言葉に、ぎょつとしてロタは彼を見上げる。

「城まで行くのかよ！？ウソだろ！だったらせめて馬をかせてくれよ、神官さま。」

「あいにく私の愛馬はいま足をケガしてるんです。それにお前にかすつもりありませんね。ロタ、つまみ食いをした罰はこれで帳消しにしますよ。どうします？」

神官の冷たい視線に、ロタはしぶしぶ承諾し太陽の光が降り注ぐなかを潔く走っていった。

それを手を振って見送った神官は、二人のやりとりを呆然ぼつぜんと見ていたココロに振り向く。先ほどは逆光のせいもあり顔があまり分からなかったのだが、こうして見ると意外と若い男だった。しかもかなりの美貌の。

神官はココロに近づき、ココロの全身を縛りつけている蔓つるに手を当て、ぽそつと何かを呟く。

すると見る見るうちに先ほどまでは元気だった蔓つるは枯れてゆき、自力でちぎれるほどになった。

（優しそうで綺麗な人…。沙織の好みそうなタイプだな…。）

ココロはそう思って、ここに沙織がいないことを今さらながら寂しく思った。

「これで大丈夫ですよ。太陽の神子エクシリオン、私の名前はジユラと申します。

できればあなたのお名前を教えてください。」

その微笑みにココロは一瞬ぼーっとしてしまっただが、あわてて理性を取り戻した。

「わ、私の名前はココロっていいいます。」

そしてジユラが言った気になる言葉について、付け加えた。

「あの、私その…なんとかの神子じゃありません。」

そのあわてぶりか、変わった名前かがおかしかったらしく神官はくすつと笑いをもらす。

「さすが神子さまは変わった名前でいらっしゃる。」

「……だから神子じゃなくてココロだってば。」

ココロが小声でぶつくさ言つと、ジユラはココロの前でひざまずき、手をとって唇を当てた。

その動作のせいでココロは真つ赤になり、顔から火がでそうだった。

「ここは光陽種^{ティバライト}が住む太陽の恩恵をうけた都、ファジャール^{エクシリオン}。太陽

の神子とはあなたのことです、ココロ。そして私は太陽の神に仕えるもの。つまりその子であるあなたは私にとって神にも等しい。詳しいことは王が話してくれるでしょう。」

ジユラは不敵な笑みを浮かべて言った。

ロタはその頃、全速力で城へと続く城下町の通りを走っていた。

「おやロタ。そんな急いでどこへ行くんだい？」

花に水をやっていた老女が走り去るロタに問う。ロタは肩ごしに答えた。

「城へ行くのさ。^{エクシリオン}太陽の神子が現れたんだ！これで夜生種^{ヴァンパイア}どもも好き勝手できないだろうよ！」

ロタは嬉しさのあまり、飛び跳ねてガッツポーズをした。

ロタがもう見えなくなっただと、老女は事の重要さをやっと理解し、びっくりして腰がぬけてしまったという。

やつのことで城門まで辿り着いたロタは、息切れが激しくて死にそうだった。

けれどあえぎながらも何とか、かたく扉を閉ざすゴツい門番兵に言った。

「おい、頼むから門を開けてくれよ！急用なんだ、大変なんだって……！」

すると門番兵は落ちついた口調で一言。

「名乗れ。」

「だから俺の名前なんかどうでも…… あーもうっ！太陽の神殿に仕える修道僧ロタだ！神官ジュラからの言伝により城まで参った！！」
すると門番兵はぴくり、と眉をあげた。

「なに。ジュラの言伝とな……？少年、少しの間待たれよ。」

そう言くと門番兵は耳のピアスを外して、それに話しかけた。

「太陽の神殿に仕える者が訪ねて来ている。名前はロタというそう
だ。ジュラの言伝で参ったと申しておる。用件は……」

言葉が途切れ、門番兵はちらりとロタを振り返る。

「用件は何だったかな？」

「……ッ！はじめからそれを訊けよ！太陽の神子エフシリオンが現れたんだ……！」

第3話 太陽の神子（後書き）

読んでくださったそのあなた様がいて下さって私は幸せ者です。
実に私的な話ですが、ロタ好きです！言葉が悪いところとか特に…
ではこの場をかりて舞台設定について説明しておきます。

この世界、パディシャン^{ヴァンパイア}ブルカには夜生種^{ヴァンパイア}と光陽種^{ティバライト}がいます。
夜生種は光陽種の血を好む吸血鬼です。光陽種^{ティバライト}とは何かというと、
普通の人間です。

中にはジュラのように不思議な力をもった者もいますが…
それではこのへんで…。＊…。＊…。＊…。＊…。＊。
＊。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0993b/>

パディシャン = ブルカ ～太陽の都と月の帝国～

2010年10月11日01時11分発行